

新初段物語

12

大須賀聖良 名流の重圧はねのけ



研究会での大須賀聖良初段。局所的な読みには胸を貸した首藤瞬八段(右)も舌を巻いた。3日、東京・市ヶ谷の日本棋院

祖父は碁会所の経営者、伯母はプロ棋士、母はアマ強豪の人氣インストラクター。大須賀聖良16は、物心ついたときには碁を打っていた。でも、好きなわけではなかった。「あまりやる気がないようだから、好きな絵をやらせたら」と、祖父は母に言っていた。それが小3のとき、突然「プロになる」と言い出した。

少し前、NHKの囲碁番組で母の特集が生まれ、プロ断念の思いを知った。母の悔しさを自分が晴らすと決めたのだ。小4から東京・阿佐ヶ谷の囲碁道場「洪道場」に通った。下校後に埼玉・大宮の自宅から両親のいづれかが車で送り迎えし、都合がつかなければ一ツ年上の姉が付き添った。母の勧めで小6から中1まで都合1年、今度は単身で韓国・ソウルの名門道場で修業した。

中2の4月、日本棋院の院生(プロ候補生)に。ところが3カ月後、「院生をやめたい」と母に手紙で伝えた。順調に伸びているのに、なぜ。囲碁の名流につながる自分への期待、視線がプレッシャーだった。その気持ちは母もわかった。娘の力になれればと、ある

トップ棋士との食事会をセッティングした。席上、母が「棋士になってよかったことは？」と尋ねると、棋士は「給料(賞金)が高い」と答えた。それで娘はやる気を取り戻した。その心を師匠の洪清泉四段(38)が推し量る。「聖良は家族思いの子。修業時代に経済的な負担をかけた思いが強い。プロで稼いで返したいんです」

昨年9月、院生最上位のAクラス在籍5カ月の条件をクリアし、女流特別採用推薦棋士になった。目標は「タイトル」だ。今も洪道場で勉強を続ける。最近、詰碁の古典「発陽論」の難問の一つを4日間、16時間かけて解いた。全問解答まであと少し。道場出身の女性棋士では、藤沢里菜女流立葵杯(21)に次いで2人目という。(大出公二)